

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

幻想の世界から来た者

【作者名】

なす水島

【あらすじ】

幻想の世界の騎士「ロール・ラスタース」彼女の国は戦乱に巻き込まれ滅んだ。その折、彼女は現代へと飛ばされる。ロール・ラスタースは現代という世界で何を成すのか。

「平和」

中世の街。

決して裕福とはいえないがそれでも活気付いた空気。

大人たちが活き活きと働き、子供達は楽しそうに遊んでいる。

鎧を身に纏う騎士達が見える。

彼らは街の警備をしているのだろつ。

その騎士達の中から一人別方向に歩いていくものが居た。

「いやー今日も平和だねえ〜」

私はそう言つと市場のほうに足を向けた。

おいしそうな匂いがするのだ。

コレがいかずにどうするよ？

「ロール、まだ任務中だといってるだろ！さっさと戻ってこないか！」

とか思つてたら同僚の騎士に怒られた。

「え〜いいじゃんか、私はこれから市場方面の警備に出ますから！」

そっちはお任せってことぞ〜！」

この国は平和だからね、特にトラブルとかないですし。

そう言つたら同僚は少し考えて。

「ったく、どうせ何言つても聞かないんだろ？報告とかしてやるから

ちっせと行ってこい！」

どつちやら許可をもらえたようだ。
持つべきは友である。

「ありがとう、お礼においしいもの買って帰るからね！」

そうやって私は市場に足を踏み入れた。

申し送れました。私はロール・ラスタースと申します。
騎士団の一員で普段はこのように警備や城周辺のモンスター討伐
などが主な仕事です。

「あら？ロールじゃない。また仕事放棄なの？」

「違うわよマリア、ただの警備任務です」

私が歩いていると知り合いのマリアと会った。
長く綺麗な黒髪でなかなかの美人さんだ。

「ふん？まあほどこにしないと雷来ちゃうよ？」

「ふっふっふ、そこは私の腕の見せ所！」

そう言っているとマリアは呆れたように歩いていった。
もしかしてあとでお小言いわれるのかな？

「いや、今日も異常はなしだね」

そう言いつつ広場の草むらに座り込む。
ここに居ると色んな空気が流れてく。

街の活気付いた音。

人々の生きていく音。

自然の音。

そして・・・

「ん？」

自然の音がおかしいような・・・
でもその違和感はすぐに消えた。

「なんだっ たんだろっ？」

「ロールおねえちゃん！」

私の名前を呼びながら一人の少女が目の前に来た。
この子は私によく懐いている子だ。

この広場で休憩しているうちに仲良くなったのだ。

「どしたの？」

「うん、わたしね、おねえちゃんにプレゼントがあるの！」

「私に？なんだろ？」

そう言つと少女は肩に下げているバッグから宝石を取り出した。

「コレ！私が一人で作ったの！」

「クリスタル？ひょっとして魔力生成したの!？」

私の手に収まるくらいのクリスタルが手渡された。

10歳前後でクリスタルを生成するなんて・・・魔法の才能あるなあ。

「それ、ロールおねえちゃんのために作ったんだから大事にしてね！」

「うん、絶対約束するよ！」

「やくそく〜！」

そう言うと少女は満足したのか家に帰っていった。

それにしても……

「綺麗なクリスタルだなあ……」

純粋な心で作られたのだろう。

とても綺麗にクリスタルは輝いていた。

「相変わらずロールは好かれてるな」

声が出た方を見るとそこには男が立っていた。

その男は私の知り合いだった。

「ちょっと照れちゃうからやめなよフリオニール！」

この男はフリオニール。

私の親友の一人だ。

とても良いやつで私もこいつといるのが楽しいくらいだ。

あ、言っておくけど恋心はないよ？

そいつのはマリアの役割だしね。

「つたく、アンタもいい加減身を固めろってのさ……」

「何の話だ？それに俺にはまだ早いような気がするんだが……」

「……はあ〜。っでレオンハルトとガイは？」

「ああ、二人とも今は街の外に出かけてたな。そいつロールはいつもの休息か？」

「まあそんな感じ、でもそろそろ行かないと団長に怒られるかなあ……」

「なら、さっさと言った方が身のためだぞ？」

「んだなあ。んじゃ、またねフリオニール」

「ああ、またな」

そう言って私は城に戻った。

そうそう、この国の名前。

まだ言ってなかったよね？

ここは『フィン』って国。

平和がずっと続いているいい国だよ。

「破られた平和」

燃えている。

街が燃えている・・・。

いつも私が通っているパン屋も。

私にいつも武器をおまけしてくれている道具屋も。

私が育った家も。

皆燃えている。

何が起きたのか。

それは単純だ。

このフィンにパラメキアが攻めてきたのだ。

「はぁ・・・はぁ・・・！」

私は走る。

生き残りが居ないか探すために。

フィンの騎士団は殆どが壊滅。

パラメキアの帝国兵は魔法の素材ミスリルを使った武器で装備していた。

フィンの騎士団の装備ではとても太刀打ちできなかったのだ。

つけ入る隙はもちろんあったがそもそも軍事力がまったく違うのだ。

私は壊滅状態だった騎士団から数人の仲間を引き連れ民の脱出をさせる事にしたのだが。

遅かった。

すでに街には火の手が上がり多くの人間が殺されていた。

「ロール！帝国軍が来たぞ！」

「数人・・・いける！」

帝国兵のミスリル装備は確かに脅威だが。

「所詮は鎧！隙間はある!!」

私はすばやく動き帝国の鎧の隙間に剣を突き立てた。

喉もとに入ったそれはいとまたやすく帝国兵の首を貫通した。

「よし・・・」

帝国兵を倒した私たちはさらに走る。

いつも私が休んでいる広場にでた。

そこにはいつもの平和な世界が待っているはずも無く。

多くの死体が転がっていた。

「そんな・・・」

「この様子では・・・」

「いや、まだ息があるものが居るはずだ！探して保護するんだ！」

私たちは必死に探した。

そこで目に付いたのは・・・。

「嘘……でしょ……」

あの子だった。

いつも私に懐いていたあの子だった。

「嘘だ……嘘だ……」

私は走り出してあの子のそばに行き肩を抱いた。

「おきてー！お願いだから……」

私はケアルの呪文をかけながら声をかけた。

少女はうつすらと目を開けた。

だが……

「ロールおねえちゃん……寒いよ……」

「!？」

その時わかった、この子は助からないと。

「おねえちゃん……あの宝石……まだ持ってる……？」

「……ええ、持ってるよ……」

「それ……大切にしてくれ……私の……思いが詰まってるんだもん」

「……わかったわ。約束する……」

そう言つと少女は微笑んで息を引き取った。

彼女からもらった宝石を見る。

クリスタルは少女の血で濡れ紅く染まっていた。

「ロール……」はもうだめだ、生きている人間なんて……」

「わかってる……わかってるよ……」
「いや、待て！帝国兵だ!!」

オツキよりも多くの帝国兵が迫っている。

「……迎え撃つ！やつらを皆殺しにする!!」
「もう撤退も出来そうにないしな……」
「付き合っぞロール!!」

そこからは多くの帝国兵と斬りあった。

どれだけ斬っても現れる帝国兵。

皆の体力も尽きかけている。

だが歩みは止めない。

ここでの奮闘がまだ生き残っている人間の手助けになるなら。

そのときだ。

「ロール！ボーゲンの私兵が援護に来たぞ!!」
「本当!?ならまだまだ持ちこたえられる!!」

しかし、同時に私は何か違和感を感じた。

なぜ、この戦闘でボーゲンの兵がこんなところに居るのか。

すでに撤退してもよいはずだ。

それに前線に居たはずなのに彼らの鎧。

綺麗過ぎる……何故だ。

何かがおかしい……。

「ぐぁ!!」

「な……ぜ……?」

「ビックス!? ウェッジ!？」

疑問が頭を回っていたときだ。
ボーゲンの配下は私たちに斬りかかった。
完全に仲間だと思っていた仲間の2人は殺された。

「お前ら・・・気でも狂ったか!？」

私は剣を取り出しボーゲンの兵士を斬った。
こいつらはミスリルの装備なんか無い。だからたやすく斬れる。
だがすでに一人となった私が無傷で居られるはずも無く。
背中から斬られてしまった。

「ぐう・・・」

そのまま私は押さえつけられてしまった。

「はっはははーざまあないなロールよー!」

そして兵士の間からボーゲンが出てきた

「ボーゲン・・・!」

「んん？何かいいたそうだなあ？」

「なんで伯爵であるアンタが帝国なんかに寝返ったんだ!」

そうだ、こいつは寝返ったんだ。

このフィンを見捨ててパラメキアについたんだ。
だから騎士団はあつという間に壊滅したんだ。

それをさっきわかった。

「俺はお前らと違って利口でなどうせ俺がついてもフィンは滅びる。
なら生き残れるほうにつくのは自然だろう?」

「オマエエエエ!!」

悔しい！悔しい！！

こんなやつを殺せない無力な私が悔しい！

「さて、そろそろお前にも止めをさそうじゃないか！」

私はこんなところで殺されるのか。

いやだいやだいやだ！！

あの子の仇を討つって決めたじゃないか！

なのにこんなところで！

「待て」

だが私への死刑宣告は止められた。

声のした方を見るとそこには黄金の鎧に身を包む男が居た。

「その女、なかなかの腕ではないか。」「」で殺すには少し惜しい……」

「」、皇帝様……」

「」……だ……」

こいつが、この男がパラメキアの皇帝……！

皆の仇が目の前にある。

殺そう。

そう思うと身体に力がみなぎってきた。

コレならこの拘束から抜け出せる！

「ファイアー！」

私を押さえ込んでるやつに魔法で攻撃し拘束を緩める。

そして一気に走り出した私は落ちている武器を拾い皇帝に走り始めた！

「「おおおおおおてiiiiiiiiii!!!」

私の刃が皇帝に届く。

あと一歩で届く!!

だが。

「ふ、無駄だ!」

「がっああ!!!」

突然私の足元に魔方陣が浮かび上がり私の身体はその魔方陣によつて捕らえられた。

「見事な気迫だ。どうだ、その気迫を私の元で発揮する気はないか？」

「だれが・・・貴様などの手先になるものか!!!」

「ふむ、では仕方が無い。その意思に免じて褒美をとらす」

そついうと皇帝の魔力が奴の手のひらに集まる。

「褒美だ、死ね!」

皇帝のフレアが私に迫る。

私の命の終わりが近いのだ。

(レオンハルト、ガイ、マリア、フリオニール・・・あんた達は生きな
れいよ・・・)

そこで私の身体は消えた。

私、志筑仁美は今習い事からの帰りです。

ピアノ、日本舞踊、お茶などとても忙しい日々ですがコレも未来の為ですから辛いと思ったことはありません。

そう思いつつ迎えの車の場所まで歩いていて何かが聞こえてきました。

「じゅう……く……」

とても苦しそうな声でもしかしたらと思いその方向へ歩くと。

「……!?」

人が倒れていました。

しかも背中からは真っ赤な血を流し体中からは焦げたような臭いも感じます。

この人はこのままでは死んでしまつ。

「待ってくださいね！今助けを呼んできますー！」

そう言つと私は迎えの車のところまで走り助けを呼びます。

「あそこに人が倒れていますー！ついてきてくださいー！」

彼女が何者なのかはわからないのですが、見捨てるなんてことはできません。

幻想の世界から現代に来たロール・ラスタース

彼女はここで何を成すのか。

それはわからない。

果たして彼女には光の導きはあるのだろうか？